

3 独立子どもアドボカシー導入のニーズとバリア

日本の子ども・施設職員へのニーズ調査

A 自治体の施設職員調査（児童養護施設 19 施設 23 人・障害児施設 8 カ所 12 人）・入所児童調査（児童養護施設 3 カ所 25 名、障害児施設 2 カ所 6 名）を行った。

< 科研費（福祉施設入所児童への外部アドボカシー導入研究：ICAS 提供モデルの構築、研究代表者；堀正嗣、期間；2013 年度～2015 年度、課題番号；25590151） >

研究の結果

- ① 基本的にイギリスと同様のサービス提供体制、実践原則、実践方法による施設訪問アドボカシー導入ニーズがあることが明らかになった（堀 2016）。
- ② 職員が認識するニーズの第 1 に、訪問アドボケイトが子どもの思いを聴くことによって「子どもの安定」がもたらされ、ひいては「エンパワメント」につながるという願いが伺えた。「聴いてあげる（ことは）・・・精神的な落ち着き、と思いますね。これが一番、施設で欠けてる」という語りからは、アドボケイトによる傾聴が子どもに〈感情の安定〉をもたらすと考えられる。それは、〈おとなへの信頼感の醸成〉や〈自尊心の向上〉を促すといえる。これらの経験を土台にして、自分の意見を施設職員等に伝える〈意見表明の経験〉を重ねていくことが望まれている。このような経験は、「自立」に向けたコミュニケーション力の育成につながることを期待された。また施設の小規模化に伴う「職員の孤立化」や「閉鎖性」の防止に役立つとの期待も寄せられた。
- ③ 入所児童からは、「しんどいときに話を聴いてもらえるかもしれない」という〈傾聴〉、「（職員に）言えないときとかは・・・言ってほしい」という〈職員への代弁〉、「（おとなからの体罰が）直る」のではないかとという〈虐待からの救済〉への期待が語られた。（堀）